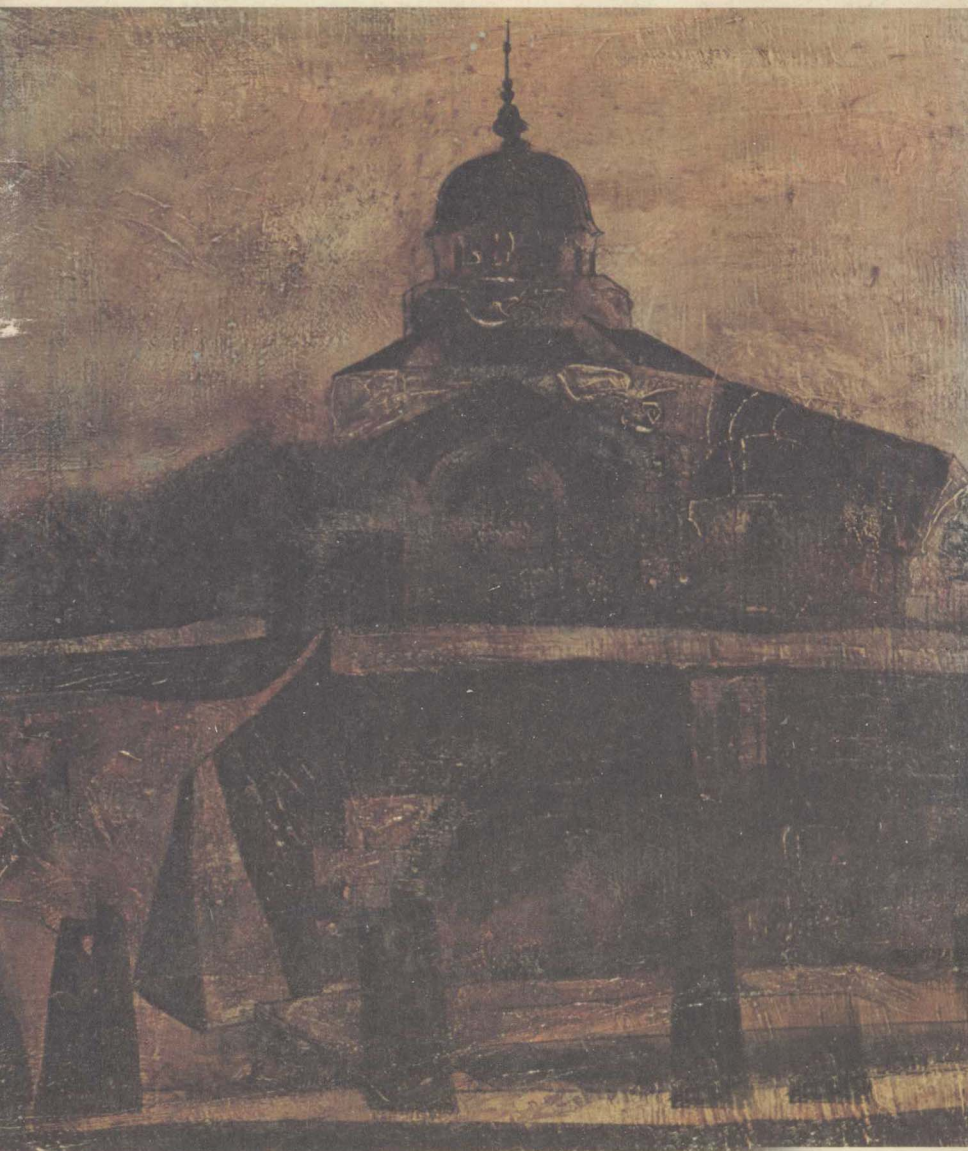
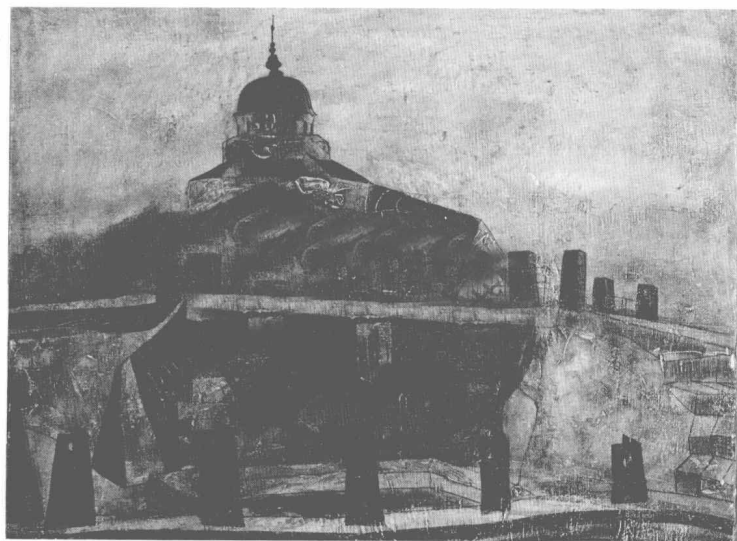


苦い夏 中野孝次



苦い夏

中野孝次



河出書房新社

苦い夏

昭和五十五年六月十六日 初版印刷
昭和五十五年六月二十六日 初版発行

著 者 中野孝次

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二

四〇四―二二〇―(営業)

四〇四―八六一―(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 亨有堂印刷

製本 大口製本

©1980

定価はカバー・帯に表示してあります

■中野孝次(なかのこうじ)
大正十四年、千葉県市川市
生れ。東京大学文学部卒。
主な著書に『実朝考』(河出
書房新社)『ブリュージュ
への旅』(エッセイストク
ラブ賞受賞、河出書房新社)
『麦熟るる日に』(平林たい
子賞受賞、河出書房新社)
などがある。

目次

苦い夏
5

険しい朝
77

彷徨の夏
173

苦い夏

苦い夏

復員して家に帰ったのは十月初めであった。

最後尾の無蓋貨車に乗っているのはぼく一人しかなかった。下館で支線に乗換えたとき、一輛しか連結されていない客車にも数輛の有蓋貨車にも大荷物を持った乗客がひしめきあっているのに嫌気がさして乗りこんだのだったが、この選択は正しかった。石炭車だったらしい無蓋車は黒い滓がいたるところにこびりついていて、が、走りだすと汚なさなどはすぐ忘れてしまった。

美しく黄熟した田が右にも左にも現れてきた。支給された毛布の包みを下にころがして、両足を踏んばって立っている復員兵の前にひらけてゆくのは、子供時分からなんとか来て見覚えのある北関東農村地帯の穏やかな田園風景だった。列車は駅毎に貨車を外したり連結し直したりしながら、秋の田のなかをのんびり進んでいった。風は少しつめたいが、ときどき煤煙がもろに吹きつけてくることをのぞけば、暑くも寒くもなく快適だった。ぼくは貪るようにあたりを眺め、よし、おれは生きて帰って来たぞ、と風にむかって叫んだ。

くろずんだ林や、防風林に囲まれた農家や、陸稲畑が現れ、それらが去るとまた青味を帯びた水田に戻った。低い丘陵が北から裾をのびして野の果てを限っていた。なぜ自分が生れ育った都会でなくて、こんな田舎に復員していかねばならないのか、ぼくにはまだうまく納得できていなかった。家族がこの町に疎開したままになっているので、仕方なくここに來たまでであった。

水の涸れた川を渡ると、ついに山裾にへばりついたような益子の町が見えてきた。田の中に立つ木造の古い駅舎も昔のままであった。乗客のほとんどがここで降りた。迎えの者たちとあらっぽい土地言葉で叫びあう人びとにまじって、兵隊姿で復員荷物をかついで歩く自分が、ただ一人の異邦人のような気がした。山裾にうなぎの寝床状に細長くつづく古い町の様子は、初めて父につれられてきたところとまるで変っていなかった。なかば傾いたような埃をかぶった家並がつづいていた。あまりに変化のないこの町に入ると、子供のぼくはそのたびに古沼に足をいれるような薄気味悪さと嫌悪を感じたものであった。いまはさすがに怯えはなかったが、ぼくは輕侮の目であたりを眺め、黄色い大荷物を肩に顔を挙げて歩いた。

母方の親戚にあたる八百屋の裏手に家族が住んでいることは、兵營に來た妹の手紙で知っていた。陽のいっぱいあたる釣瓶井戸で、嫂と妹がかがんで大根を洗っていた。声をかけると嫂が目をはり歯茎を剥きだして、「あれえ、いま帰ったの」と、すっかり田舎言葉にかえって叫んだ。冷飯ぞうりをはいた弟たちが近所の子と駆けてきて、荷物をかついでいった。予想しないわけはなかったが、仮住居の様子には胸を衝かれた。

ぶかぶかの坊主疊の入った暗い八畳一間が、外からまる見えだった。藁葺き屋根の家全体が傾

いでいる上に、荒壁には新聞紙や広告が貼られ、この狭い一間に市川の家にあった家具がいっぱい詰めこまれているのだった。母が出てきて、小さなきつい目で見つめ、「おまえ帰るのがずいぶん遅かったじゃないの」と咎めるように言った。髪をうしろで束ねた小さな顔の皮膚がてかてか光って、前より表情がきつくなった感じであった。たちまちみなに取囲まれわいわい迎えられても、家へ戻ったという気が少しもなかった。さしかけになった北側の板の間に腰かけゲートルを外しながら、ぼくはあらためてあたりを見まわし、あまりのひどさに声も出なかった。

「おや、おまえこんなひどい毛布しか貰ってこなかったのかい。」

たちまち弟たちがひろげた復員毛布を見て、母が素頓狂な声をあげた。

「上の××さんの息子なんか、純毛の新品ばかり七枚も貰ってきたっていうのに。毛布なんかいまだき米何升出しても買えないんだよ。」

二枚三枚継ぎはぎした擦り切れ毛布をつかんで口惜しそうに言うのが、浅ましくて、こんなはずじゃなかった、という気がする。復員したら今度こそ母にも妹たちにも優しくしようとひそかに思っていたのだったが、その気持は現実の肉親に接したとたん奥にひっこんでしまった。ぼくは腹立ちまぎれに叫んだ。

「ちえっ、くだらねえ、そんなものどうだっていいじゃねえか。こっちは軍隊から物なぞ貰って帰ろうなんて気は、初めっからなかったんだ。」

復員の日、少しでもいい品物をせしめようと醜く奪い合った同年兵の姿を思い出し、家に帰ってまで毛布なぞがまず話題になるのが情なかった。田舎に来て母までが欲ばけしてしまったのか

と思った。

「いいじゃないのそんなこと。それより、兄さん少しふとったようね。」

妹の幸枝がとりなすようにそう言ったのがせめてもの救いだった。幸枝は長い髪をうしろに二つに編んで、ふっくらした頬が赤く、急におとなびた顔立ちになっていた。

隣近所の大人たちまで集ってきて挨拶し、ひとしきりにぎやかに立話していた。まわりに聞える声がみな、この地方独特の尻上りに高まるあらっばい言葉ばかりで、母や弟までが近所の者と話すときは田舎なまりになっていた。やっと家族の許に帰ったという安堵はありながら、気持はいつまでも宙に浮いたまま落着けなかった。

父は家にいなかった。夕方早目にわかされた野天風呂に入って、すぐ裏手からひろがる稲田を眺めていると、それでもさすがに肉親のもとに帰った安堵感がゆっくりと湧いてきた。母が焚口にかがみこんで、「どう、ぬるかないかい」ときく。「いや、いい湯だ。」自分にこのようにこまごまと気を遣ってくれるところは、世の中にここしかないのであった。薄暮がゆっくり野にひろがっていった。裏手の道から父が現れた。白鼻緒の草履履きですたすたやってきて、しゅっと器用に手鼻をかみ、風呂の中のぼくに気づいて「おっ」と目をみはった。

「帰^{けえ}っていたのか。」

「うん、さっき帰ってきたんだ。」

「うむ。」

濃い眉の下の目がまぶしそうにこっちを見て、そのまま家の中に入ってしまった。いくらか頬も

痩せ頭頂が急に薄くなったように見えた。湯から上って、出された着物に着替え、あらためて父に挨拶した。白毛まじりの無精ひげをのばして、綿シャツに毛の腹巻きをした恰好は変らないが、あばらやの中で見るせいかいにもなりふり構わぬ粗野な田舎じいという感じであった。口を開くと上の前歯が一本うるのように抜けていた。かつての父にあった、あくまで自分が正しいと信じ切っている男の畏怖させるような気迫が消えてしまっていた。

さしかけになった北の板の間から野菜を刻むリズムミカルな音がして、嫂のヤスエと妹の幸枝が夕餉の仕度にかかったらしかった。父が部屋の中でふんどし一つの裸になって野天風呂に出ていったあと、あらためて荒涼とした家の中を見まわさずにはいらなかった。こんなひどいところに家中で住んでいるのかと思うと、一家中が急に落ちぶれたようで心細かった。真間川に近い明るい市川の家が懐しかった。外でだれかが、「おばやん、いたけえ」と大声でおらんでいた。母が「あいよう、なんだねえ」と井戸端から大声で叫びかえしていた。もうすっかり田舎に根を下した人のようだった。そういうやりとりの一つ一つが神経を刺戟し、ここへくると早く市川の家に戻りたくなってくるのは、子供のころ来たときとまったく同じだった。

まあいい、戦争は終わった、じきにまた市川に帰るさ、とぼくは自らを慰めた。このときはまだすぐにでも市川に帰れるとばかり信じ切っていたのである。

食事が始まるとしかしさすがに家族のもとに帰った解放感がこみあげてきた。一家七人、見覚えのあるまるい大きなチャブ台のまわりに集って顔つきあわせれば、よくも悪くも世界にこれしか自分の肉親はいないのだと納得するしかなかった。赤飯がたかれ、野菜ばかりだがよくいため

たケンチン汁から胡麻油の匂いが香ばしく漂った。父とぼくのためには白い濁り酒が用意されていた。

「まあ無事に帰ってきてよかった。」

べたつと背をまるくして坐った母が、あらたまつてという感じでそう言い、嫂のヤスエが白い出っ歯を剥き出して人の善い笑い顔をむけた。父は二つになった兄の子を膝にかかえ、「どれ、洋子にはいいちゃんぐわしてやっか」と田舎言葉で頬の真赤な娘の口に箸をもっていった。

暗い電燈の下でめしを貪り食っている七人、これがおれの肉親だ、とぼくは嫌悪と懐しきで胸がつかえたようになって思った。実際に家に戻ってきてみれば、ここには自分が兵營の中で夢想したような甘やかなものはなく、すべてどこか食い違っていたが、これをこのまま受入れるしかなかった。ぼくは氣を滅入らせぬためにわざと陽気な復員兵の役を演じ、兵營での失敗談をしてみなを笑わせた。父までが前歯の欠けた口をあけてうつろに笑い、「それじゃ殴られても仕方あるめえな」と兵隊経験者らしい感想をのべた。ひとしきり笑ったあと、母が急に真顔になってぐちっぽく言った。

「これで孝太郎さえ戻ってきてくれれば、何も言うことないんだけどねえ。」

兄は八百屋の当主と同じ時期に入隊し、ビルマ戦線にいったままだに消息が知れなかった。「もうそれは言いつこなし。八百屋のカネちゃんも帰ってきてないんだもの、いくら言ったって仕方ないじゃない。」

幸枝がびしゃつときめつけるように言った。頬の赤い顔は娘々しているが、そういう口調から

ふいに大人びた配慮が顔をだした。幸枝は言い放つと、それをしおに立上りてきばき後片付けを始めた。濁り酒で赤黒く顔を光らせ、鼻孔をひらいて荒い息をしていた父は、やがて部屋いっぱい敷き詰められたふとんの一つに早々ともぐりこんだ。「あーあ、仕方がない、寝るか」と、やけっぱちのようなじむさい科白を口にして弟たちも寢床に入り、二人でぼそぼそしばらく話しかっていた。食って寝るだけの生活か、とぼくは思った。八時過ぎたばかりだというのがここではもう店屋はみな大戸を閉めて、街道は暗く静まりかえっていた。濃い闇にひたされた静けさはすべてを吸いこんで、倦怠に侵された時間だけがただ茫々とひろがっていた。

何も彼も変らない、この空気はおれを朽ちさせる。裏を流れる溝に小便をしながら、暗い野面にむかってそう思い、田舎町の暮しを呪った。幸枝が井戸端で米を研いでいた。ぼくは水を汲みあげて、釣瓶の端に口をつけてごくごく飲み、何か声をかけてやらねばと思い、幸枝にきいた。「親父がなんだか元気がないみたいだけど何かあったのか。」

「うん、それがね」と幸枝は米を研ぐ手をやめて口籠った。「終戦とわかったときからあんなふうにながっくりしてしまったのよ。」

「おかしいじゃないか、終戦をよろこばないなんて。」

「だって、市川の家を売って、必死の思いで引越してきたとたんに戦争は終わったなんていうんだもの、だれだってがっくりくるわよ。」

「えっ、市川の家は売っちゃったのか、ここへは疎開したんじゃないかったのか。」
思わず高くなった声に、幸枝は「しっ」と制して、ひそひそ声でつぶけた。

「そのことはいま家じゃ禁句なんだから、大きな声出さないで。でも、手紙に書かなかったかしら。」

「手紙にはこっちに引越したとしかなかったぞ。」

「そう、じゃ今言うわ、売ったのよ。終戦になるちょっと前に。」

「なんてばかなことしたんだ」と、思わずまた声が高くなった。

「だって仕方ないわよ、食糧はなし空襲はひどくなるしで、あのときはそれが一番いいと思ったんですもの。」

暗くて表情は見えないが、声が慄えて、幸枝の口をとがらした顔が見えるようだった。

「なにも売らなくなったってよかったじゃないか。」

「そりゃ後からなら何とだって言えるわよ」と、急に感情が激してきたのか、幸枝のソプラノの物言いが涙声に近くなった、「実際ばかみたいだったのはたしかなんだから。わたしだってあの終戦の放送聞いたときは腰が抜けたようになってしまったわ。」

「ばかな、なんてばかなことしたんだ。」

「そんなこと言ったって仕方ないじゃない、こっちは悪いこと一つもしてないんですもの。悪いのは本土決戦だの一億玉砕だのと言っておきながら、急に戦争はやめだなんて言いだした国のほうだわ。終戦の詔勅さえなければわたしたちだってこんなばかな目に遇わないで済んだんだもの。」

しゃがんだまま兄に抗議している幸枝の声は、終りのほうは涙でうるんでいた。そうか、そう

いうことだったのか、と打ちのめされたように思い、ぼくは妹のそばを離れた。妹を一言でも慰さめてやることは思いつかなかった。帰るべき故郷がなくなったという打撃のほうがあまりに大きすぎて、ひとのことにまで気をまわす余裕がなかった。ではあの家はなくなってしまうのか、真間川もあの町もなくなつて、こんな田舎にずっといなければならなかったのか。突然自分の頼りにしていた生存の基盤そのものが消滅したような打撃であった。あるあいだは何とも思わなかったが、もはや戻れぬとなると自分が生理的にどんなに深くあの町と結びついていたかがわかり、身にこたえた。

そのままぼくは暗い通りへ歩き出していた。何者へもしれぬ怒りがこみあげてきた。戸をしめた町並は暗く静まりかえり、火の見櫓の下にだけ小さな裸電球がわびしくともっていた。くそっ、こんな田舎に閉込められてたまるかと思う。午後町に着いたときの高揚感が今は遠い昔のことのように思われた。皮肉なことだった。もし戦争がつづいていれば、自分は生きて帰ってこれなかったろうし、父のとった決断は家族のいのちを救う賢明な処置とまではやされていたに違いなかった。理窟では一応そう納得するものの、今後ずっとこんな田舎町に暮すことになるのかと想像すると、またしても怒りと絶望感がつきあげてきて、憤らしい思いは結局父一人にむかって集中していくしかなかった。

暗い空に下弦の月がさみしく浮んでいた。細長い町なので、裏にはすぐ真暗な田がひろがり、建物や竹藪がくろくろと闇を呑んでいた。ぼくは下駄を蹴って町を端まで歩き、「くそっ、くそっ」と叫んだが、どこからも反響はきこえてこなかった。